

クローズアップ・コレクション

クロード・モネ 《橋から見た アルジャントウイユの泊地》

1874年 | 油彩・キャンバス
公益財団法人岡田文化財団寄贈

鈴村麻里子



アルジャントウイユはフランス・パリの北西に位置するセーヌ川沿いの街。画家クロード・モネ(1840-1925)は、1871年から1878年にかけて同地に居住し、初期の印象派を代表する数々の風景画を制作しました。

1870年7月に普仏戦争が勃発すると、モネは戦禍を逃れロンドンに渡ります。事態の收拾を待って1871年11月に帰国した画家は、翌月アルジャントウイユに居を移しました。同地のセーヌ川には、馬車や歩行者が通行する道路橋と汽車が走る鉄道橋が架かっていましたが、戦争でいずれもが崩壊。1874年に描かれた本作では、改修された道路橋の南端に近いところから、西を向いて岸辺や川面が捉えられています。水上には航行・停泊するヨットやボートが描かれ、空には日没間近の太陽が浮かんでいます。

アルジャントウイユは、セーヌ川の幅が広く流れがまっすぐであることから、戦前からヨットレースの会場として多くの人々を集める行楽地でした。1870年のガイドブックによれば、同地には200ものヨットが停泊していたといえます。1874年に描かれた本作の風景に、もはや戦争の爪痕は見出しません。岸辺の賑わいは迅速な復興の賜物だと言えるでしょう。

本作には、同一地点から描かれた、姉妹作品とも言える作品があります(参考図版/右ページ)。所蔵先はアメリカ合衆国インディアナ州、ブルーミントンのシドニー・アンド・ロイス・エスケナジ美術館(インディアナ大学付属美術館)。2点を比較してみれば、インディアナの作例は、三重の作例より視点を左にずらして描いていることが分かります。そして、まだ日が高い時間帯なのでしょう。モチーフの固有色を活かした彩色がなされ、緑豊かな川岸や小屋のオレンジ屋根が目に見え、左手の岸辺には遊歩道を歩く人影も見え、北岸の工場の煙突からは、煙が細くたなびいています。

両作に共通して、左手の岸辺と水上の小屋を結ぶタラップの脇には、天井のひとときわ高い船室を持つ船が停泊しています。これは、画家自身が所有するアトリエを設えた船、通称「アトリエ船」です。ロンドンで知り合った画商の協力により経済的余裕を手に入れた



参考図版 | クロード・モネ《アルジャントウイユの泊地》1874年 油彩・キャンバス/シドニー・アンド・ロイス・エスケナジ美術館(インディアナ大学付属美術館)蔵 筆者撮影

モネは、遅くとも1873年春にはこの船の使用を始めました。三重とインディアナの作品は、パリのマルモッタン美術館所蔵のスケッチブックに収められた共通の下絵に基づきますが、実はそこに「アトリエ船」は描かれていません。同船は、完成作を描く段階になって、前景に挿入されたと考えられます。一見すると即興的な風景に見える2点の油彩画ですが、この恣意的な「追加」からは、風景に表出した作家の自意識が感じられるのではないのでしょうか。

ちょうど1874年頃を境に、行楽地の喧騒や街の工業化に背を向けるかのように、モネの作品には主題選択の変化が見られるようになります。翌年以降、画家が賑やかな泊地に停泊する自船を描くことはありませんでした。次にアトリエ船が画中に現れるのは、2年後の1876年のこと。そこには、豊かな自然の残る支流を進む船が描かれているのです。

米国での作品調査は、公益財団法人鹿島美術財団の助成により2022年6月に実現しました。モネのアトリエ船に関しては、2023年度刊行の『鹿島美術研究』に拙稿が掲載される予定です。

表紙解説

「宮城県美術館所蔵 絵本原画の世界2022-23」展より 橋本三奈

お料理をすることと食べることが何より好きなふたごの兄弟の野ねずみ「ぐりとぐら」。食材を探しに森へ出かけたところ、大きなたまごが落ちていたのを見つけて。運びたいけど動かないたまご… 2匹は森で大きなカステラを作って仲間たちと一緒に楽しく食べました。最後にたまごのからで作ったものは…?

世代を超えて今も読みつがれる「ぐりとぐら」の魅力は、心温まる絵とリズムカルな文の一体感ではないのでしょうか。山脇(当時は大村)百合子が大学生のときに、姉の中川李枝子のお話に絵を描いた作品で、姉妹によるはじめての合作絵本です。1956年に福音館書店が創刊した月刊絵本「こどものとも」から誕生した名作です。

山脇は、白い背景に親しみやすい線とやわらかい色調によって、明るく素朴で生き生きとした世界を表現しました。本作は、「ぐりとぐら」の1場面の原画で、ユーモアあふれる絵から「たまごのからでくるまをつくる」ことが想像できるでしょう。



山脇百合子《ぐりとぐら》26-27頁原画 宮城県美術館所蔵

利用のご案内

開館時間 | 午前9時30分 - 午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 | 月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌日閉館)、2023年10月10日(火)、2024年1月9日(火)、2月13日(火) 年末年始 [2023年12月29日(金) - 2024年1月3日(水)]

観覧料 | ○常設展示 [美術館のコレクション+柳原義達の芸術/特集展示] 一般 310(240)円 学生 [大学・各種専門学校等] 210(160)円 高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体料金 ○企画展示/その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率も含めて無料となります。 ※障害者手帳等(アプリ含む)をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。 ※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は、各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。 ※関西文化の日[2023年11月18日(土)、19日(日)]は常設展の観覧が無料となります。

メールマガジン | 三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式Twitter | 三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。 Follow us on Twitter @mie_kenbi

三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM 〒514-0007 三重県津市大谷町11 TEL.059-227-2100(代表) FAX.059-223-0570 https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/



交通 | 津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分 ※できる限り公共交通機関をご利用ください

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費 | 一般会員:3,000円 ペア会員:5,000円 グループ会員(4名):8,000円

◎特典 会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、ミュージアムショップご利用割引等。 詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館 協力会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費 | 年間一口 法人:50,000円 個人:25,000円 準会員:10,000円

◎特典 展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。



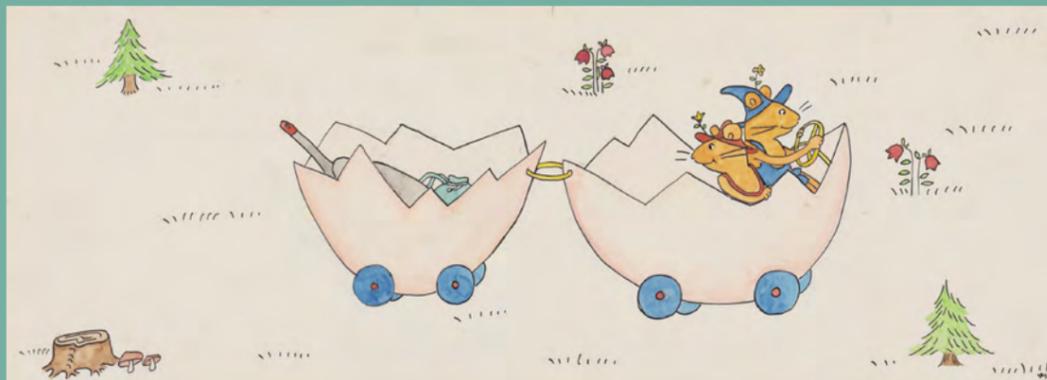
三重県立美術館ニュース

HILL WIND 53

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS

三重県立美術館ニュース 「HILL WIND 53」

発行日 | 2023年9月20日(休・無断転載) 企画・編集・発行 | 三重県立美術館 デザイン | 濱田尚子 印刷 | 株式会社アグレーン



雪斎の肖像画 見つける

村上 敬



図1 | 増山雪斎像（筆者撮影）

長島藩（現在の三重県桑名市長島町）の藩主・増山雪斎（1754-1819）の肖像画が見つかりました（図1）。1935（昭和10）年の展覧会¹に出品されて以来、行方がわからなかった肖像画です。詳しい情報は文末にまとめ、ここでは絵の作者と内容について考えてみましょう。

作者については、サインによって、「^{ぶんき}文熙」という人が描いたとわかります。江戸の人名録²によれば、小倉雪峰という画家の諱が「文熙」でした。その人名録では、雪斎と雪峰の名が並んで記されていますが、これは両者とも当時築地に住んでいたためです。作者は雪峰である可能性があります。雪峰に関して、雪斎の書が巻頭を飾る画集「東都時名画帖」（三の丸尚蔵館蔵）に収められた《百合に蜂図》は、作者が特定できない作品でしたが、サインに「雪峰寫」とみえます。その「寫」の筆跡は、肖像画に書かれた「寫」の筆跡と似ているといえます。よって、《百合に蜂図》の作者も雪峰かもしれません。もっとも、雪峰は伝不詳の画家です。雅号に「雪」の字を冠していることから、大国載雪や金子雪操、小林雪古のように、雪斎の弟子とも考えられます。

作品の内容は、雪斎の姿を描き、その上に雪斎本人が自作の漢詩とサインを書いています。いま注目したいのは、雪斎のサインです。現代語訳すると「1817年の夏^{せきてん どうじん}石顛道人64歳 病気であるが努めて書く」という意味になります。雪斎が亡くなる2年前に書かれたものですが、最晩年の雪斎は手足が麻痺しており³、そのためサインが斜めになっているのでしょうか。サインにある「石顛道人」は、石を集め、観

賞することが非常に好きであった雪斎の愛称のようなもの。正式には別号といいます。一般的に江戸時代の肖像画は、描かれる人の外面的特徴を鋭く捉えながらも、内面、すなわち風格を描き出すことに重きをおきました。この肖像画でも、表情や衣服（^{かくしやうえ}鶴氈衣）、持物（^{れいしじょうによい}靈芝状如意）によって、雪斎の風格を表現しています。では、それはどのような風格でしょうか。雪斎のとなりに置かれている石をご覧ください（図2）。

この石は、^{すいせき}水石と呼ばれ、小さな盆にのせられた石から大自然を感じ取るという、常人にはなかなかとり着けない趣味の品です。雪斎を慕っていた^{たにぶんいち}谷文一（1786-1818）という画家が、肖像画に描かれたものと同じ水石を写生しています（図3）。文一の写生図の上には、雪斎が漢詩を書き、この水石を「学者之風」、すなわち学者の風格がただよう品と讃えています。雪斎は、老病を押して、この肖像画を描かせました。そのとき人生を振り返り、自分を象徴するものとして水石を座右に置いたのでしょうか。いうまでもなく、この水石は単なる趣味の披露ではありません。学者の風格、すなわち藩主の家系に生まれながら、学問・芸術の世界に生きた雪斎が自らを体現させたものなのです。

さいごに、雪斎の肖像画には、行方不明となっているものがもう一点あります。1910（明治43）年、三重県庁^{さんし}蚕糸課室に雪斎筆^{ちゅうちじょう}《虫豸帖》（東京国立博物館蔵）とともに展示され、嘉仁親王の台覧に供された肖像画です。その肖像画は、追跡調査の結果、残念ながらすでに焼失してしまった可能性が高いことがわかりました。その顛末はまたの機会にご報告します。



図2 | 増山雪斎像 画面左下部（筆者撮影）



図3 | 水石図（「竹南竹北居蔵品図録」富山美術倶楽部、1940年より転載）

作品情報 |
寸法＝縦77.2cm×横31.5cm。材質技法＝絹本著色。
落款＝「董文熙焚香謹寫」（墨書）、「文熙之印」（朱文方印）。
賛＝「（引首）「玄廬」（朱文長方印）從他號我石顛顛平素／且愛書畫禪近日懶眠／渾不管道遠自占一／壺天／丁丑夏月／石顛道人時年六十四力病題／曾氏君濕」「雪斎」（白朱文連印）。

註

- 1 「豊公以後名家肖像展覧会」（会場：大阪城天守閣、会期：1935年9月10日～10月5日）
- 2 瀬川富三郎編『江戸方角分』1818年写、国立国会図書館蔵、20丁
- 3 間片新左衛門写『増山河内守年譜』1826年写、イェール大学バイネッキ貴重書・手稿図書館蔵、1818年9月23日条

「笠岡市立竹喬美術館所蔵名品展 小野竹喬」を終えて

道田美貴

三重県立美術館では、この春、「笠岡市立竹喬美術館所蔵名品展 小野竹喬」（4月22日～6月11日）を開催しました。竹喬美術館は、京都画壇を代表する日本画家・小野竹喬研究の拠点です。展覧会では、竹喬の代表作および素描108点を展観、日本画革新運動・国画創作協会を率い、後進に大きな影響を与えた竹喬の画業を紹介しました。近代日本美術の再検証を長期的な目標としてきた当館にとって、竹喬は重要な画家のひとりであり、また、志摩市大王町^{なまきり}波切を描いた三重ゆかりの画家でもあります。今回の展覧会で、三重とかかわりの深い《波切村》（1918年）の当館初公開が叶いました。この機会に、京都の日本画家たちに多く描かれた波切について振り返っておきましょう。

波切は、志摩半島南東端の漁村です。この地に取材した最初期作として、千種掃雲《海女》（1908年）があげられます。松阪出身の日本

画家・^{たなみがくしやう}田南岳嶂の第6回文展出品作《志摩大王崎》（1912年）も早い時期の作品。褒状を得た岳嶂は、「大王岬は自分の生れ故郷の志摩波切村の名所である。風光明媚で寔に得難い勝地であるが惜しい哉餘り世に知られて居らない、處で此の勝地を社会に紹介したいと思つたのがあの畫を描いた動機であつた。」としています¹。翌年の第7回文展には、^{こばやし}小林霞村（和作）《志摩の波切村》、^{かそん}土田麦僊《海女》。そして、竹喬《波切村》（1918年）、入江^{いりえ}波光《臨海の村》（1919年）が国画創作協会展に登場するに至ります。以降、雄大な自然や自然と一体化した人々の営みに魅せられた京都の画家たちは、この地に日本画革新の糸口を求め、意欲的に波切に取り組みました²。

岡山県の笠岡に生まれ、穏やかな瀬戸内に親しんだ竹喬にとって、波切の自然は新たな挑戦にふさわしい魅力ある場所に映ったようです³。4曲1双の《波切村》では、右隻に朝、

左隻に夕べの景を配し、海面、樹木、人々、そして空を対照的に描き分けました。右左隻は異なる地点から描かれていますが⁴、一双の作品として大胆に構成し、群青、緑青、代赭、裏箔も用い、力強く色鮮やかに描き上げました。西洋画に憧れ、写実的な風景表現に挑んだこの作品は、国画創作協会第1回展に出品された記念碑的作品。《波切村》を三重の地でご覧いただくことで、かつて、波切が新しい日本画創造の舞台となっていたことにも、思いを馳せていただけたのではないのでしょうか。

さて、最後になりましたが、交換展として竹喬美術館で開催された、「近現代日本画 三重県立美術館名品展」（4月29日～6月18日）にも触れておきましょう。当館の日本画コレクションは未だ発展途上ですが、同展に出品された竹喬の師・竹内栖鳳が滞欧後に描いた《虎獅子図》、伊勢出身の伊藤小坡や松阪出身の^{うだてきそん}宇田菰邨の作品は特色あるコレクション



《波切村》展示風景



波切村の下絵展示風景

です。あるいは、伊勢出身で第3代帝国美術院長を務めた福原謙二郎旧蔵作品や、竹喬と同じく、画業の最後に独自の水墨表現を模索した^{よこやまみさお}横山操《瀟湘八景》なども近現代日本画あるいは当館に興味を持っていただく契機となったかもしれません。昨年ともに開館40周年を迎えた両館が、コレクションを軸とした展覧会で次なる一步を踏み出し、コレクションの重要性和交換展の可能性を示したこともまた、本展の成果のひとつと考えています。

註

- 1 吉田班嶺編『帝国絵画宝典』（1918年 帝国絵画協会）
- 2 京都の日本画家たちと波切を直接的に結び付けた人物として、鳥羽出身で洋画家、陶芸家として活躍した新井謙也が想定されています（石井重矢子「国展の集った波切村」『新美術新聞』463号 1987年、毛利伊知郎「宇田菰邨「南島寫生」の周辺」『大王町を描いた画家たち』1999年 絵かきの町・大王町実行委員会）。画家以外にも、田山花袋「志摩めぐり」などの文学作品、漁村風景や海女の絵葉書も同地の魅力を広めたと考えられます。さらに、1911年には、参宮鉄道の山田（伊勢市）～鳥羽間も開通し、交通の便も向上しています。
- 3 小野竹喬「『波切村』に就て」『美術画報』42-2（1918年）
- 4 波切を描いた作品について長年調査を重ねておられる瀧勇氏、瀧泰子氏に、「波切村」他、多くの波切を描いた作品の取材場所についてご教示賜りました。